

使徒行伝17章1-15節 「ユダヤ人の二つの反応」

1A 妬みに駆られるユダヤ人 1-9

1B 「このイエスこそキリスト」 1-3

1C 会堂へ向かう一行 1

2C 三回の安息日 2

3C 苦しみを受けられるキリスト 3

2B 町の暴動 4-9

1C 信じるギリシア人たち 4-5

2C 広場への引きずり出し 5

3C 転覆の告発 6-9

1D 世界を騒がせてきた者 6

2D カイサル以外の別の王 7

3D 群衆と役人の動揺 8-9

2A 聖書を毎日調べるユダヤ人 10-15

1B 素直な者たち 10-11

1C 熱心な受け入れ 10-11

2C 多くの信者 12

2B テサロニケからの騒動 13

3B アテネまでの逃亡 14-15

本文

使徒の働き 17 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、16 章まで来ました。今日は、17 章を一節ずつ見て行きたいと思います。今朝は、1 節から 15 節まで、午後礼拝で、16 節から 34 節まで見て行きます。

ところで、私たちは、同じ福音を語っても、人によって反応や応答がまちまちであることを知っています。イエス様が四つの種類の土の喩えで語られたように、同じみことばでも、全く受け入れない人、受け入れても試練にあうとすぐにつまずく人、思い煩いによって実を結ばない人。そして、立派な心で受け入れて、みことばを保ち、多くの実を結ぶ人たちがいます。聞いている本人たちは、自分の取っている反応こそが正しい反応だと思っています。正しく、当たり前だと思っているので、他の全ての人も同じ反応をすと思っています。けれども、語っている者たちは、自分の大切にしているものや、その時の心の状態などが、同じ福音によって明らかにされるのを見ます。バイブル・カフェを数か月ぶりに再開し、早速、いろいろな方々の反応を見ましたが、信じるんだったら、キリスト教や仏教だという方もいれば、チランを配っている時に、手を振ってきて、「宗教は要らん」という方もおられました。

私たちはこれから、パウロの一行のマケドニアにおける宣教の旅で、テサロニケとベレアの町での宣教を見ますが、そこにいるユダヤ人たちが正反対の反応をするのを見ます。彼らの反応によって、イエス・キリストの福音がどういものであるかを浮き彫りにしています。

1A 妬みに駆られるユダヤ人 1-9

1B 「このイエスこそキリスト」 1-3

1C 会堂へ向かう一行 1

¹パウロとシラスは、アンピポリスとアポロニアを通して、テサロニケに行った。そこにはユダヤ人の会堂があった。

パウロとシラスは、エグナティア街道を歩いて西に向かっています。アンピポリスという町は、ピリピから 60 キロ、大きな町ですが特に宣教らしきことはしなかったようです。そしてアポロニアは、さらに西に 40 キロです。ここでも通過しただけです。そして、西に 55 キロ進むとテサロニケに行きます。そこに、「ユダヤ人の会堂があった」とあります。そうです、パウロの一行はユダヤ人の会堂、シナゴグのあるところを求めて西に向かっていました。パウロたちは、異邦人に神が救いへの道を開いてくださったことを知っています。けれども、初めにユダヤ人たちに語り、そして、そこにいる改宗者へ神を敬う異邦人に語り、それによって福音が異邦人にも伝わることを願っています。すでに、聖書を知っている人々に、そこで約束されているキリストは、イエスなのだと言え伝えることができるからです。

ところで、ピリピの町はローマの植民都市であったのに対して、テサロニケの町はギリシア時代に始まった自由都市でありました。自主憲法を定め、自治が認められていて、選挙で選ばれた人々による議会政治もありました。さらに、自分の貨幣を鑄造することもできたのです。この町は、アレクサンドロス大王の総督の一人、カッサンドロスによって造られ、自分の妻であって、アレクサンドロスの異母妹であるテッサロニカに因んでその名前を付けました。ピリピの歴史で言及しました、ローマの内戦であるフィリピの戦いで、オクタウィアヌス(アウグストゥス)に付いたので、その戦いの後に自由都市の特権を得ることが出来ました。その伝統が続き、パウロたちが宣教に来た紀元一世紀の時も、皇帝カイサルに対する忠誠心は強烈なものでした。

また、ローマ時代に、エグナティア街道の要衝の町として大いに栄えました。港町でもありますから、海ともつながっています。しかし、パウロたちがここに来る前に、大きな地震が起こったそうです。人々は失意と苛立ちの中にいたそうです。私たちがここを訪れたのは 2018 年ですが、似たような空気を感じました。今の町テッサロニキは、首都アテネに次ぐ第二の都市です。けれども、経済破綻の影響は数年経った後でも色濃く残っており、町の半分の建物は廃墟になっているような雰囲気でした。大きな都市でありながらも、誇りをまだ失っておらず、失意と苛立ちの中にいるという空気が、テサロニケの新しい信者たちが受ける困難と無縁ではないと思います。

2C 三回の安息日 2

² パウロは、いつものように人々のところに入って行き、三回の安息日にわたって、聖書に基づいて彼らと論じ合った。

「三回の安息日にわたって」と言っていますから、三週間もしくは、それよりも短い期間です。実際にどれだけパウロたちが滞在していたのか、いろいろ意見はありますが、かなり短いことは確かです。そこで、テサロニケの信じたばかりの人たちがとても気になっていて、ようやくテモテを遣わしてどうなっているのかを知って、手紙を書いたのが、コリントからでした。それが、テサロニケ人への手紙の第一と第二です。パウロの手紙の中で、最も早く書かれた最初の手紙です。新しく信じたばかりなのに、それでも困難に耐え忍び、愛の労苦、信仰の働き、イエス様が戻って来られる希望について、その地域一体に噂が広まっていました。

パウロは、三回の安息日で、聖書に基づいて論じ合ったのですが、三度目の正直ではないのですが、聖書の中で「三」の数字は、確かなもの、事実と確認したもののような意味合いがあります。イエス様が三日目によみがえったのもそれです。死んだことが三日によって確認されて、それによみがえられたということです。ここではパウロが、論より証拠、ではないですが、イエスがキリストであることを、聖書を証拠にして論じて行ったのです。

3C 苦しみを受けられるキリスト 3

³ そして、「キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならなかったのです。私があなたがたに宣べ伝えている、このイエスこそキリストです」と説明し、また論証した。

私たちにとって、「キリスト」とは馴染みのない呼び名です。イエスが名前で、キリストが苗字ぐらいにしか感じないですね。けれども、キリストとは救世主のことであり、私たちを救われる使命を帯びた存在として、聖書で一貫して約束されていることです。創世記で、アダムが罪を犯した直後に、女の子孫が蛇の子孫の脳天を打ち砕くという約束から始まり、詩篇 22 篇には、詳細に十字架での苦しみが預言されていて、イザヤ書 53 章には、我々の咎のためにこの方が傷を負われたという預言になっています。

ルカによる福音書で、甦られたイエス様が弟子たちに対して、「ルカ 24:44b-46 わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」それからイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われた。「次のように書いてあります。『キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、』私たちは今、聖書通読のひと時という、共に聖書通読をする時をズームで持っていますが、創世記から始まるイスラエルの物語は、まさにキリストご自身の話と言って過言ではないでしょう。その延長に、イエスが現れて、この方がイスラエルのメシアなのだ、という流れになっています。

ところで、多くの人は、イエスが救い主であることを認め、信じることは、いかに論理的ではないことか、自分の理性を押し潰さないでそんなことはできないとします。しかし、イエスが救い主、キリストであるとみならず論証は、十二分にあります。宗教をしている人たちは、思考を停止させているというツイートがありました。私は反論しました。「信仰を持ってから、もっといろいろ思考するようになった。」神を心だけでなく、知性をもって愛しなさいという命令もありますね。

ただ気を付けなければいけないのは、言葉だけでは福音は伝わらないことです。パウロは論証しましたが、決してその言葉だけでテサロニケの人々が信じたのではないことを知っていました。「Ⅱテサ 1:5 私たちの福音は、ことばだけでなく、力と聖霊と強い確信を伴って、あなたがたの間に届いたからです。」力と聖霊と強く確信を伴って、彼らの間に届きました。

2B 町の暴動 4-9

1C 信じるギリシア人たち 4-5

⁴ 彼らのうちのある者たちは納得して、パウロとシラスに従った。神を敬う大勢のギリシア人たちや、かなりの数の有力な婦人たちも同様であった。

パウロの聖書からの論証を聞き、ユダヤ人たちの中ではわずかですが、納得した者たちがいました。けれども特徴的なのは、「神を敬う大勢のギリシア人たちや、かなりの数の有力な婦人たち」です。先に話しましたように、テサロニケはギリシア文化の濃厚な町です。大半が土着のギリシア人でした。そしてユダヤ人の会堂、シナゴグには、ギリシア人であるけれどもユダヤ教の神を敬う人々がいました。その彼らが**大勢**信じたのです。

中でも特質なのは、「**かなりの数の有力な婦人たち**」です。ギリシア社会では、相続する子を宿す正妻の他に、一緒にデートする愛人がいて、性欲を満たすだけの娼婦というのが当たり前になっていました。けれども、ユダヤ教の中では女性の尊厳を守る戒めが多くあります。ですから、婦人がたくさん集まっていたのです。さらに、イエスは、ユダヤ人のラビとしてその律法の精神を体現しました。姦淫の現場で捕らえられた女でさえ、彼女が悔い改め、真つ当な生活ができるように、その罪を赦し、婦人よと丁重に呼びかけたのです。ですから、女性が**多く**信じて行き、その後の初代教会にも女性や子供たちが**多く**教会に集うようになりました。しかも、ここでは**有力な婦人たち**です。有力者たちの妻ですね。彼女たちが信じたので、ユダヤ人だけでなく、社会構造に触れるこの動きに、役人たちの心も揺るがすことになります。

2C 広場への引きずり出し 5

⁵ところが、ユダヤ人たちはねたみに駆られ、広場にいるならず者たちを集め、暴動を起こして町を混乱させた。そしてヤソンの家を襲い、二人を捜して集まった会衆の前に引き出そうとした。

ユダヤ人たちが「**ねたみ**」ました。まず、ユダヤ人たちにとって、約束のメシア、キリストが苦しみ

を受けなければいけないということを聞いた時は、聖書から論証されても認めたくなかったでしょう。全くそのように教えられていなかったし、キリストは栄光の輝く王であります。パウロは、「I コリ 1:23 しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとって愚かなことですが」と言いました。彼らは、しるしをもってメシアが現れると信じていたのに、ローマの十字架に付けられるのですから躓きです。私たち人間一般もそうではないでしょうか？こうやったら救われたはずなのに、なんでそうならなかったの？という失望です。しかし、神にはもっと大事なことがありました。自分自身の中にある罪の問題でした。それを取り除くために、主は十字架から降りなかったのです。

そして、妬みは、ギリシア人が大勢、信仰を持ったことです。彼らが改宗して、それで救われると信じていたのに、割礼も受けなくてそのまま信じ、受け入れられていきました。これが到底許されなかったのです。私は、一度、「恵みは、人々を怒らせる」というメッセージをしたことがあります。神の恵み、その気前良さがあまりにも大きいので、それが許せないと思ってしまうのです。また、自分自身にその大らかさ、気前良さは、都合がよすぎるとして受け入れないようにさせてしまいます。けれども、そのままのあなたが受け入れられるのです。悔い改めの、へりくだりの心で神に近づけば、そのまま受け入れられるのです。そして罪が清められ、心が一新されます。

そして、「広場にいるならず者たち」とありますが、広場というのはアゴラのことです。市場があったり、人々の集会があったり、また役人たちが裁判をする席、ビーマもあり、行政的なことも行われます。そこにたむろっていた、ならず者たちにユダヤ人たちが話しかけて、ならず者たちは何か事を起こしたいですから、騒動を起こしたのです。けれども、この動きを察知した、新しく信じたテサロニケ人たちが、パウロとシラスをヤソンの家から逃がして、匿っていたのでしょう。二人がいませんでした。ヤソンは、ギリシア系のユダヤ人です。彼とその家族を襲って、「会衆」の前に引き出したのです。ここが自由都市であることを思い出してください、民主主義があるので、会衆の前に出すのは、彼らが民の前で裁かれるためでした。

3C 転覆の告発 6-9

1D 世界を騒がせてきた者 6

⁶しかし、二人が見つからないので、ヤソンと兄弟たち何人かを町の役人たちのところに引いて行き、大声で言った。「世界中を騒がせてきた者たちが、ここにも来ています。

これは、すごい告発です。「世界中を騒がせてきた」と言っています！もちろん、そんなことをパウロの一行はしていません。良心的なローマ市民としてパウロたちが生きています。けれども、霊的には、それだけの激変をもたらしていると言ってよいでしょう。信じないユダヤ人たちは、イエスがこのキリストであると主張していることは、これまでの世界の秩序を揺るがしかねない根本的な変革だと分かったのでしょうか。少なくとも、自分自身は、キリストにあれば新しく造られなければならないことも、薄々分かったのでしょうか。自分の人生を根底から変え、また世界が根底から変えら

れるのですから。

なぜ、何の力もないキリスト者たちが、国の権力によって迫害されていたのか？何の脅威でもないはずなのになぜ？と思います。けれども、キリストは王の王、主の主であります。人の人生も世界も、いつかはキリストご自身に服さないといけないのです。それを初めに行ったのが、キリスト者です。自分の人生と生活をイエスの主権に引き渡したのです。そのことを薄々知っているからこそ、何の力を持っていないはずのキリスト者に迫害の矛先を見せます。

2D. カイサル以外の別の王 7

⁷ヤソンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、『イエスという別の王がいる』と言って、カエサルの詔勅に背く行いをしています。」

これは、恐ろしい告発です。ピリピの時は、ローマの慣習を変えてしまう、我々をユダヤ化させようとしてしまうというものでしたが、こちらはローマ帝国の転覆を企てている反逆罪です。イエス様が十字架刑の処せられた時の罪状です。

3D. 群衆と役人の動揺 8-9

⁸これを聞いた群衆と町の役人たちは動揺した。⁹役人たちは、ヤソンとほかの者たちから保証金を取ったうえで釈放した。

この告発は、ユダヤ人たちの入れ知恵だったのでしょうが、さすがにやりすぎでした。テサロニケは皇帝に忠誠を誓っていました。それゆえこの告発は怒りを通り越して恐れになりました。ちょうど、ピラトがイエス様を裁いている時に、十字架につけろという訴えを聞いて、恐れてきたのと似ています。こんなことが我が町で起こったことになれば、とんだことになると思いました。それで役人はかえって慎重になりました。ヤソンとその他の者たちが、本当にそんな罪を犯しているのか、証拠が十分になれば裁けないと判断したのです。それで保証金を取っただけで釈放しています。

そして、10 節には、「^{10a}兄弟たちはすぐ、夜のうちにパウロとシラスをベレアに送り出した。」とあります。パウロとシラスを匿っていたのですが、送り出したのです。テサロニケ人への手紙第一には、パウロがどれだけ彼らのことを心配しているか、詳しく書かれています。わずか数週間の期間しかいなかったのですから、教会に長老を建て上げる時間もなく出て行きました。サタンが彼らを惑わして、信仰の実を摘み取ってしまうのではないかと心配でした。パウロは、そこでアテネにいた時にテモテをテサロニケに遣わします。すると、彼らはひどい困難の中にいましたが、それでも信仰の働きと、愛の労苦と、イエス・キリストを望む希望で満たされていたのです。

ところで、ここテサロニケにいた間に、パウロはピリピの教会から、二度も支援を受け取っていました。「ピリ 4:16 テサロニケにいたときでさえ、あなたがたは私の必要のために、一度ならず二度

までも物を送ってくれました。」ピリピの人たちの中で始まった、良い働き、神の働きです。

2A 聖書を毎日調べるユダヤ人 10-15

1B 素直な者たち 10-11

1C 熱心な受け入れ 10-11

¹⁰ 兄弟たちはすぐ、夜のうちにパウロとシラスをベレアに送り出した。そこに着くと、二人はユダヤ人の会堂に入って行った。¹¹ この町のユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも素直で、非常に熱心にみことばを受け入れ、はたしてそのとおりにどうか、毎日聖書を調べた。

テサロニケから、ベレアに彼らは動きました。テサロニケもそうですが、当時ベレアもユダヤ人が多くいました。会堂があるので、そこに向かったのではないかと思います。南西に80^{キロ}ぐらいの距離です。私たちがバスに乗って一時間ぐらいでしょうか、テッサロニキを出て、田園風景になっていて、ほっとしました。そして、今は、「ヴェリア」と呼ばれる町ですが、とても落ち着いた雰囲気、まさにこのユダヤ人の人々の姿と似ているなと思ったものです。穏やかで、知的、高貴という感じます。

彼らは、偏見を横に退けて、熱心に聞きました。そして、その言われていることを聞いているだけでなく、自分たちで毎日、聖書を調べていたのです。英語では、「ベレア人のように」という言い回しがクリスチャンの間であります。つまり、自分自身でしっかりと聖書で確かめていく姿勢です。これには、御言葉に対する熱心さが必要です。主体的に見ていくことが必要です。私たちの教会では、以前、帰納的な聖書の学び方について学びました。自分自身で聖書本文を観察して、そこから主が何を語られているのかを見ていくことです。別にその帰納的な学びをしなればいけない、ということではありません。けれども、教会である私たちが、自分自身で聖書を開いて、主が何を語られているのかをしっかりと聞いていくという、ベレア人のような高貴さを持ちたいですね。

2C 多くの信者 12

¹² それで彼らのうちの多くの人たちが信じた。また、ギリシアの貴婦人たち、そして男たちも少なからず信じた。

ベレアにおいては、ユダヤ人たちの間でも多くの人たちが信じました。そして、ギリシア人では、貴婦人だけでなく、男たちも結構の人が信じて行きました。彼らの素直な姿が表れていますね。

使徒の働きを読み進めますと、パウロの宣教旅行の仲間に、テサロニケ人やベレア人がいることを見ることができます。「20:4 彼に同行していたのは、ピロの子であるベレア人ソパテロ、テサロニケ人のアリスタルコとセクンド、デルベ人のガイオ、テモテ、アジア人のティキコとトロフィモであった。」様々な困難の中にあっても、神は確実に宣教の働き手の仲間を起こしておられます。

2B テサロニケからの騒動 13

¹³ ところが、テサロニケのユダヤ人たちが、ベレアでもパウロによって神のことが伝えられていることを知り、そこにもやって来て、群衆を扇動して騒ぎを起こした。

妬みというのは、ここまでのマイナスのエネルギーを出します。ベレアにまでわざわざ来て、群衆を扇動させたのです。イエス様を十字架に付けるまで食い下がらなかったユダヤ人指導者たちのことを思い出します。パウロは、このような執拗なテサロニケのユダヤ人の迫害者のことを、次のように第一の手紙で述べています。「2:15-16 ユダヤ人たちは、主であるイエスと預言者たちを殺し、私たちに迫害し、神に喜ばれることをせず、すべての人と対立しています。彼らは、異邦人たちが救われるように私たちが語るのを妨げ、こうしていつも、自分たちの罪が満ちるようにしているのです。しかし、御怒りは彼らの上に臨んで極みに達しています。」御怒りの神にお任せしています。とても悲しいことですが、ユダヤ民族に紀元後 70 年に、悲劇が訪れました。ローマによって、エルサレムが徹底破壊されて、神殿もなくなり、世界にユダヤ人が捕え移されました。

3B アテネまでの逃亡 14-15

¹⁴ そこで兄弟たちは、すぐにパウロを送り出して海岸まで行かせたが、シラスとテモテはベレアにとどまった。¹⁵ パウロを案内した人たちは、彼をアテネまで連れて行った。そして、できるだけ早く彼のところに来るようにという、シラスとテモテに対する指示を受けて、その人たちは帰途についた。

ベレアはかなり内陸にあります。ピュドナという港が最も近く、おそらくそこからパウロとベレア人の兄弟が船出したのでしょう。そして、一気に南下して、アテネまで連れて行きます。そして、パウロが初めて、宣教旅行の中で独りになります。それまでは、いつも誰かがいました。初めはバルナバとマルコ、そしてバルナバ、そして第二次においては、テモテがついて来て、ルカもトロアスから同行しました。次に、不本意にもたどり着いたアテネで、パウロが行った伝道活動を午後礼拝で見に行きたいと思えます。

彼は、アテネにおいて、また次のコリントにおいて、どのような状況だったのかを、こう伝えています。「I コリ 2:3 あなたがたのところに行った時の私は、弱く、恐れおののいていました。」これが、彼の心理的な状況でした。彼は私たちと何ら変わらない、人間であることが分かります。これだけの命の危機があれば、弱く、恐れおののきますね。そのような中でも、彼が宣べ伝えるイエス様によって、人々は救われていくのです。私たちではないということが分かります。同時に、どんなことがあっても、主に対して忠実に仕えるということが分かります。また、逃げていく中で、救われる人々が次々に起こされます。「負け犬のような気分だけれども、実は神が勝利から勝利への導いている」様子が分かります。パウロはそれで、第二コリントでは、「土の器にキリストにある神の栄光の宝」を持っていることを話しています。どうか、弱さの中にむしろキリストの力強さが働くという神の御業を知ってくださいますように。